

# 温かい心で共に幸せになるまちへ



おがさわらはるいち  
のぼりべつ 登別市(北海道) 小笠原春一  
Haruichi Ogasawara

## おもてなしの心で温かい登別

登別市は北海道南西部の太平洋岸に位置し総面積212・21km<sup>2</sup>、冬季は雪の少ないとても住みやすい自然環境豊かなまちです。日本有数の温泉郷である「登別温泉」は、北海道最大の都市・札幌市や新千歳空港からも鉄道で約1時間とアクセスも優れており、年間390万人余りの観光客をお迎えし、約128万人のお客さまが宿泊されます。近年は、東アジアや東南アジアからの観光客が増加し、温泉には多言語が響き渡り、平成27年度の訪日外国人宿泊者延べ数は47万人となる等、国際色豊かな観光地としてにぎわいを見せています。

近年、国内の外国人観光客の動向は、団体旅行から個人で自分の目的に合わせて旅行するFIT（外国人個人旅行者）が急増しており、本市もその傾向が顕著に表れています。このような変化を的確にとらえ、市内の旅館・ホテルでは、富裕層向けに高級客室への改装や質の高い食事の提供を行う等、幅広いニーズに対応することで、どの宿泊施設も稼働率（宿泊率）は高い状況で推移しています。

また、私たち登別市民は、新たな観光戦略として登別観光協会、登別旅館組合等と連携し、温泉地に宿泊されるすべてのお客さまに対して日中の市内滞在時間



「登別地獄まつり」のオープニング（マイク前が筆者）

をもっと増し楽しんでいただきたいという想いから「全市観光」の取り組みを進めています。

地域に存在する観光資源の付加価値をさらに高め、おもてなしの心を大切に、市民自らが地域で楽しく暮らせる環境づくりを進めることで、観光客や市民の歓声が市内いたるところで沸き上がるようなまちづくりに挑戦します。

温泉の湯は、人を幸せにする万能薬だと考えます。これからもその温泉を主軸に市内の魅力を世界に発信し、誰からも愛される登別市を目指します。

## 私の大好きな言葉は「和」

私の座右の銘は「和」です。

私は、小学生高学年から高校までの8年間、ほとんどの学期で学級委員長を務め、その間「1人では何もできない」「思いを実行に移すためには、仲間から賛同されることが何よりも大事」「対等な立場で認め合う大切さ」等を学ぶことができ、これはのちの社会人としても大いに役立つ体験となりました。

その学生時代の体験が「和」につながり、これまでの成功例や失敗例がこの言葉の重さや大切さを感じさせてくれたと思っています。

民間人だった30代は市の公職を複数務めさせていただき、多くの市民と出会い、理想のまちづくりについて真剣な議論を交わしました。このころの経験は、市長に就任してからのさまざまな方針決定に大変役立っています。特に当時は、登別市内に留まらず、となりまちの白老町や室蘭市のまちづくりなどの会議やイベントにも積極的に参加し、その当時の仲間は今でもかけがえのない仲間としてつながっています。

こうして、40歳まで市内外のまちづくりに参画した時も一番役に立ったのは「和」の心であり、この「和」の精神こそ、本市のまちづくりに一番必要だと確信し、41歳で登別市長選挙に挑戦できるチャンスを迎えました。以後9年経ちましたが、おかげ

さまざま「和」の心は多くの市民の皆さまと共有でき、まちづくりにおいて「当事者意識が芽生えること」「役割分担の意識が明確になる」等、「協働のまちづくり」に必要な要素の原理原則になっています。「和」のおかげで、現在は市民の皆さんに「感謝」の気持ちでいっぱいです。

### 「景観とみどり」の施策と趣味

私の前職は造園業ですが、9年間市長を務めている中で進められなかったことの1つに景観とみどりの推進があります。一昔前は、歩道に落ちた枯葉の掃除のために、



市民との懇談会（スライド右側が筆者）

市民がクレームを言っていた時代でした。しかし現在は、自分たちの住む地域は自分たちできれいにするという当事者意識で自ら清掃される町内会がほとんどです。つまり、景観とみどりを推進するための市民意識の「機」が到来したのです。みどりの推進は私が一番得意とする分野ですが、昨年度、「登別市景観とみどりの条例」も施行され、いよいよ世界が訪れたいくなるような、明日の日本を支える観光地登別として景観とみどりについて市民と議論を本格化させることができるようになりました。

私は休日の機会あるたびに、趣味で剪定せんていをする等、今もみどりに対する感覚を誰よりも敏感にしておくことを自身の目標としています。季節毎でみどりの感じ方が違うので、自然が人を喜ばせる感覚を常に創造すること、そして、自ら楽しむことが大事だと認識しています。

昨年実施した市民との懇談会で、観光客にどのようなおもてなしの心が必要か議論したところ、多くの市民から、ゴミが無く四季折々の花木が楽しめるきれいな街並み、道路の保全等、景観とみどりを推進する発言が多くありました。

私は、市民自らが、景観とみどりの維持に当事者意識を持っていたかどうかという「機」が、まさに今到来したと確信しました。

3年後の2020年、本市は市制施行50周年の節目を迎えます。それまでに、条例

を基軸とした「景観計画」を策定し、さらに美しいまち並みの形成に取り組みたいと考えています。

「和」で一番大切なことは、チャンスの時期を「待つ」ということだと考えます。私はこれからも市民と行政がしっかり議論し、さまざまな考えや体験を有機的につなげ、双方の合意形成が図られるチャンスを生かし政策展開を進めることで、市民の幸せを実現することはもちろん、本市を訪れる国内外からの観光客がこれまで以上に楽しんでいただけるまちづくりのために邁進してまいります。



市民との沿道花壇整備（左から1人目が筆者）